慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	BCCWJに現れた複合動詞「押しつける」：自然科学系(含技術・工学) ジャンルと社会科学ジャンル
Sub Title	
Author	村田, 年(Murata, Minori)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2020
Jtitle	日本語と日本語教育 No.48 (2020. 3) ,p.31- 54
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20200300-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』48：31–54（2020.3）

BCCWJ に現れた複合動詞「押しつける」

―自然科学系（含技術・工学）ジャンルと社会科学ジャンル―

村　田　　年

1.　はじめに

村田・山崎（2012）、村田（2013, 2015, 2016[1)]）では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）を用いて、自然科学系（含技術・工学）書籍、社会科学書籍、文学書籍に現れた複合動詞を対象に、22 の後項動詞を指標として使用頻度調査を行った。その結果、村田（2015）で述べたように、文学、社会科学、自然科学系（含技術・工学）の各ジャンルにおいて延べ語数が数万語と多くても、無数の異なる複合動詞が用いられているのではなく、ある程度限られた数の複合動詞が繰り返し用いられていることが明らかとなった。

日本語教育の現場において、複合動詞の導入を考える際には、ジャンル別に頻度の高い語を優先的に抽出して教育を行うことが効率的だと言える。しかしながら、実際の教育現場での個別の語の扱いを考える場合、語彙的複合動詞か統語的複合動詞かの区別以外に（その区別も判断が付きかねる例がある[2)]）、後項動詞が同じ語彙的複合動詞の中でも、前項動詞との関係で後項動詞の意味が異なる場合があり、それらを一つにまとめて扱うことは混乱を招くと考えられる。例えば、村田（2013）でも取り上げた例として「持ち出す」の場合を考えよう。語彙的複合動詞「持ち出す」は、「（鞄から本を）取り出す」、「（口座からお金を）引き出す」とは違い、単に「出す」が「外部への移動」という意味を持つだけでなく、「（家からお金を）持ち出す」、「（蔵から米を）持ち出す」のように、副詞「黙って」、「秘かに」

等を伴って用いられ、否定的な意味を持つことがわかる。また、受身形になった場合も、例えば「法廷に離婚請求が持ち出される」、「正当化するためにそうした概念が持ち出され」というように、単に「出す」が用いられる場合と比べ、「外部に出す」ためにそれなりの力や抵抗がかかり、「わざわざ出す」という意味合いが強くなると考えられる。

このように、後項動詞が同じ語彙的複合動詞でも、後項動詞の意味から全体の意味を類推できるものばかりではない。その意味で、日本語教育の現場での複合動詞の扱いを考える時、実際に用いられている個々の複合動詞の用法を丁寧に見ていく必要があると考えられる。

本稿では、BCCWJ に現れた、後項動詞「つける」を持つ複合動詞に焦点を当て、ジャンル別ならびにジャンル共通の高頻度語を抽出し、その中の「押しつける」の用法について考察する。紙幅の都合上、本稿では、自然科学系（含技術・工学）ジャンルと社会科学ジャンルを対象とする。

2. 研究目的

上記に挙げた三つのジャンルの書籍における複合動詞の使用頻度調査を通じ、自然科学系（含技術・工学）、社会科学、文学の各ジャンルを超えて、共通して高頻度で現れる複合動詞の存在が確認された。

本研究では、その中から、造語力の強い後項動詞「つける」を持つ複合動詞に焦点を当て、それぞれの語のジャンル別の使用頻度、また、三ジャンル全体における使用頻度の割合を調べ、各ジャンルに特徴的な高頻度語群を抽出する。また、個別の高頻度語について、その用法を具体的に考察し、日本語教育の現場に資する方法を検討する。

3. 研究方法

これまでに行った三つのジャンル（自然科学系（含技術・工学）、社会科学、文学）の複合動詞「～つける」の使用頻度調査に基づき、各ジャンル

に共通して頻度の高い複合動詞「～つける」の語群を抽出する。次に、個別の高頻度語が用いられる環境を明らかにするため、具体的に、①目的語となる名詞はどのようなものか、②共起する副詞にはどのようなものがあるか、③形態面で、受身形で用いられる場合はどのような場合かという三つの観点から、その用法を分析する。最後に、その結果を踏まえ、指導上の問題を明らかにし、より体系的な複合動詞教育に結びつける方法を検討する。

なお、本稿では、紙幅の関係から、高頻度語「押しつける」の、自然科学系（含技術・工学）並びに社会科学ジャンルにおける用法を中心に考察し、文学ジャンルにおける用法の分析と考察は別稿に譲る。

4.　調査結果　―ジャンルを超えて現れる高頻度語－

村田（2016）では、22 の後項動詞を指標に、上記三つのジャンルに出現した複合動詞の使用頻度について、延べ語数並びに異なり語数の表を作成した（村田 2016, p130）。ここでは、それを総使用頻度順に並べ変えたものを表 1[3)] 並びに表 2 として挙げる。

各ジャンル別の延べ語数を見ると、自然科学系（含技術・工学）と文学では「つける」は、「だす」、「こむ」に続き、第 3 位となっている。社会科学系では、「だす」、「こむ」、「あげる」、「あう」に続き、第 5 位となっていて、三つのどのジャンルでも高頻度の後項動詞となっていることがわかる。異なり語数では、自然科学系（含技術・工学）と社会科学では第 8 位、文学では第 9 位となっている。

次に、後項動詞「つける」を持つ複合動詞の出現状況について、紙幅の都合上、各ジャンルの第 35 位までを表 3[4)] として示す。各ジャンルで第 35 位までに入った語は、自然科学系（含技術・工学）は使用頻度数 12 回以上（総数 2547）、社会科学は 17 回以上（総数 3070）、文学は 89 回以上の語（総数 11911）である。

表 1　22 後項動詞の延べ語総使用頻度数順と各ジャンルの使用頻度数

	後項動詞	総使用頻度数	自然科学系	社会科学	文学
1	だす	38230	4690	7018	26522
2	こむ	31974	4522	5630	21822
3	つける	17528	2547	3070	11911
4	あげる	16359	2236	3498	10625
5	かける	14129	1321	2304	10504
6	あう	12416	1519	3273	7624
7	つく	11310	1356	1879	8075
8	あがる	10162	1244	1259	7659
9	いれる	5718	1216	2145	2357
10	きる	4828	613	999	3216
11	かかる	4044	272	500	3272
12	あわせる	3807	1275	717	1815
13	たてる	3636	560	1000	2076
14	なおす	3546	572	961	2013
15	たつ	3237	665	750	1822
16	でる	2882	382	550	1950
17	ぬく	1919	223	403	1293
18	こめる	1898	189	361	1348
19	いる	1675	118	239	1318
20	なおる	822	38	101	683
21	とおす	503	53	118	332
22	まくる	495	57	100	338
	合計	191118	25668	36875	128575

* 自然科学系：自然科学系（含技術・工学）を意味する。

表 2　22 後項動詞の異なり語総使用頻度数順と各ジャンルの使用頻度数

	後項動詞	総使用頻度数	自然科学系	社会科学	文学
1	だす	1028	218	275	535
2	あう	976	234	352	390
3	かける	689	94	100	495
4	こむ	607	178	175	254
5	きる	543	102	119	322
6	なおす	446	128	113	205
7	あげる	394	102	110	182
8	つける	324	93	92	139
9	かかる	230	35	46	149
10	まくる	212	36	49	127
11	あがる	199	56	55	88
12	つく	193	52	57	84
13	たてる	164	38	41	85
14	あわせる	158	42	50	66
15	でる	147	36	36	75
16	ぬく	146	28	38	80
17	いれる	141	52	37	52
18	こめる	135	34	40	61
19	たつ	103	21	25	57
20	いる	98	24	22	52
21	とおす	90	13	25	52
22	なおる	16	4	5	7
	合計	7039	1620	1862	3557

* 自然科学系：自然科学系（含技術・工学）を意味する。

三つのジャンルの中で、後項動詞「つける」を含む複合動詞の総使用頻度数に占める割合が圧倒的に高いのは、文学で、約 68％（11911/17528）である。次が、社会学で約 18％（3070/17528）、最後は自然科学系（含技術・工学）で約 15％（2547/17528）となっている。

ここでは便宜上、各ジャンルごとに総使用頻度数の約 6 割までを占める上位語を見ていく（表 3 の色付き部分を参照）。自然科学系（含技術・工学）は上位 7 語で約 61％、社会科学は上位 8 語で約 61％、文学は上位 13 語で約 61.5％であった。以下にその語を挙げる。

自然科学系（含技術・工学）：7 語
見つける、取りつける、結びつける、張りつける、盛りつける、巻きつける、押しつける
社会科学：8 語
見つける、結びつける、押しつける、引きつける、取りつける、突きつける、受けつける、駆けつける
文学：13 語
見つける、押しつける、駆けつける、睨みつける、叩きつける、突きつける、引きつける、締めつける、投げつける、取りつける、結びつける、巻きつける、押さえつける

総使用頻度数の約 6 割までを占める上位語は三ジャンル全体で延べ 28 語に上るが、異なり語数は 16 で、高頻度語が重複していることがわかる。

ここでは、異なり語 16 語の使用頻度数について、各ジャンルにおける総使用頻度数に占める割合を指標に、ジャンルに特徴的な語を見ていく。表 4 は、16 語それぞれの結果を示したものである。

表 4 を見ると、どのジャンルでも使用頻度第 1 位を占めるのは「見つける」である。各ジャンルにおける「見つける」の使用頻度は、自然科学系（含技術・工学）では総使用頻度数の約 21％（544/2547）、社会科学でも約 21％（646/3070）、文学でも約 22％（2646/11911）というように、どのジャンルでも、総使用頻度数の約 2 割強を占めていることがわかる[5)]。他の語に比べ、圧倒的な頻度の高さである。

表3　各ジャンルにおける上位語（第35位まで）

順位	自然科学系（2547）		順位	社会科学（3070）		順位	文学（11911）	
1	見つける	544	1	見つける	646	1	見つける	2646
2	取りつける	413	2	結びつける	334	2	押しつける	758
3	結びつける	143	3	押しつける	260	3	駆けつける	645
4	張りつける	139	4	引きつける	146	4	睨みつける	604
5	盛りつける	131	5	取りつける	144	5	叩きつける	417
6	巻きつける	88	6	突きつける	125	6	突きつける	357
7	押しつける	86	7	受けつける	117	7	引きつける	318
8	受けつける	60	8	駆けつける	100	8	締めつける	313
	引きつける	60	9	決めつける	79	9	投げつける	284
10	くっつける	53	10	植えつける	72	10	取りつける	275
	縫いつける	53	11	張りつける	57	11	結びつける	257
12	駆けつける	47	12	押さえつける	54	12	巻きつける	232
13	ぶつける	45	13	縛りつける	51	13	押さえつける	221
14	締めつける	43	14	投げつける	50	14	決めつける	196
15	決めつける	36	15	見せつける	49	15	見せつける	177
16	吹きつける	28	16	貸しつける	46	16	打ちつける	167
17	突きつける	27	17	漕ぎつける	40	17	張りつける	158
18	押さえつける	26	18	売りつける	33	18	聞きつける	157
	焼きつける	26	19	買いつける	29	19	言いつける	151
	遣っつける	26	20	叩きつける	28	20	縛りつける	148
21	こすりつける	25	21	遣っつける	27		殴りつける	148
22	割りつける	24	22	くっつける	25	22	吹きつける	131
23	塗りつける	21		巻きつける	25	23	遣っつける	129
24	生みつける	19	24	打ちつける	24	24	怒鳴りつける	123
25	括りつける	17	25	落ちつける	23	25	痛めつける	118
	寄せつける	17	26	備えつける	22	26	くっつける	110
27	辿りつける	16	27	辿りつける	19	27	落ちつける	108
28	漕ぎつける	15		睨みつける	19	28	こすりつける	107
29	植えつける	14		踏みつける	19	29	切りつける	104
	打ちつける	14	30	言いつける	18	30	叱りつける	102
	叩きつける	14		送りつける	18	31	嗅ぎつける	94
32	落ちつける	13		書きつける	18	32	括りつける	92
	縛りつける	13		叱りつける	18		撫でつける	92
	据えつける	13		締めつける	18	34	受けつける	89
35	踏みつける	12	35	追いつける	17		呼びつける	89

＊自然科学系：自然科学系（含技術・工学）を意味する。
＊色付き部分は、総使用頻度数の約6割までを占める上位語である。

表 4　16 語の使用頻度数の各ジャンルにおける総使用頻度数に占める割合

順位	自然科学系（2547）		割合	順位	社会科学（3070）		割合	順位	文学（11911）		割合
1	見つける	544	0.21	1	見つける	646	0.21	1	見つける	2646	0.22
2	取りつける	413	0.16	2	結びつける	334	0.11	2	押しつける	758	0.06
3	結びつける	143	0.06	3	押しつける	260	0.08	3	駆けつける	645	0.05
4	張りつける	139	0.05	4	引きつける	146	0.05	3	睨みつける	604	0.05
4	盛りつける	131	0.05	4	取りつける	144	0.05	5	叩きつける	417	0.04
6	巻きつける	88	0.03	6	突きつける	125	0.04	6	突きつける	357	0.03
6	押しつける	86	0.03	6	受けつける	117	0.04	6	引きつける	318	0.03
				8	駆けつける	100	0.03	6	締めつける	313	0.03
								9	投げつける	284	0.02
								9	取りつける	275	0.02
								9	結びつける	257	0.02
								9	巻きつける	232	0.02
								9	押さえつける	221	0.02

＊自然科学系：自然科学系（含技術・工学）を意味する。

表 5　16 語の総使用頻度数に占めるジャンル別使用頻度割合

	1		2		3		4	
ジャンル	見つける	割合	押しつける	割合	取りつける	割合	駆けつける	割合
自然科学系	544	0.14	86	0.08	413	0.50	47	0.06
社会科学	646	0.17	260	0.24	144	0.17	100	0.13
文学	2946	0.69	758	0.69	275	0.33	645	0.81
総使用頻度数	3876		1104		832		792	
	5		6		7		8	
ジャンル	結びつける	割合	睨みつける	割合	引きつける	割合	突きつける	割合
自然科学系	143	0.19	8	0.01	60	0.11	27	0.05
社会科学	334	0.46	19	0.03	146	0.28	125	0.25
文学	257	0.35	604	0.96	318	0.61	357	0.70
総使用頻度数	734		631		524		509	
	9		10		11		12	
ジャンル	叩きつける	割合	締めつける	割合	張りつける	割合	巻きつける	割合
自然科学系	14	0.03	43	0.11	139	0.39	88	0.26
社会科学	28	0.06	18	0.05	57	0.16	25	0.07
文学	417	0.91	313	0.84	158	0.45	232	0.67
総使用頻度数	459		374		354		345	
	13		14		15		16	
ジャンル	投げつける	割合	押さえつける	割合	受けつける	割合	盛りつける	割合
自然科学系	9	0.03	26	0.09	60	0.23	131	0.81
社会科学	50	0.15	54	0.18	117	0.44	8	0.05
文学	284	0.83	221	0.73	89	0.33	23	0.14
総使用頻度数	343		301		266		162	

＊自然科学系：自然科学系（含技術・工学）を意味する。

自然科学系（含技術・工学）では、「見つける」以外で使用頻度が高いのは、「取りつける」（約 16%）で第 3 位以下を大きく引き離している。第 3 位は「結びつける」（約 6%）で、第 4 位は約 5%を占める 2 語、「張りつける」と「盛りつける」である。第 6 位は約 3%を占める 2 語、「巻きつける」と「押しつける」である [6)]。

社会科学では、第 1 位が「見つける」（約 21%）である。それ以外で非常に高い割合を占めるのが「結びつける」（約 11%）である。続いて、第 3 位に「押しつける」（約 8%）、第 4 位は約 5%を占める 2 語、「引きつける」と「取りつける」である。第 6 位は、約 4%を占める 2 語、「突きつける」と「受けつける」である。最後は第 8 位の「駆けつける」（約 3%）である。

文学では、「見つける」が総使用頻度数の約 22%を占め、圧倒的に高いが、第 2 位以下は落差が非常に大きく、第 2 位の「押しつける」が約 6%で、その後は漸減していく。第 3 位は「駆けつける」と「睨みつける」の 2 語で約 5%を占める。第 5 位は「叩きつける」（約 4%）、第 6 位は「突きつける」、「引きつける」、「締めつける」の 3 語で約 3%を占める。最後の 9 位は約 2%を占め、「投げつける」、「取りつける」、「結びつける」、「巻きつける」、「押さえつける」の 5 語が並ぶ。

このようにジャンル別に見ていくと、三ジャンルに共通して頻度が圧倒的に高い「見つける」は別として、自然科学系（含技術・工学）では、「取りつける」の使用頻度割合が際立ち、自然科学系（含技術・工学）ジャンルに特徴的な語だと見なせよう。また、社会科学でも、「結びつける」の使用頻度割合が 1 割を超える高い頻度で、これも社会科学ジャンルに特徴的な語だと言えそうである。一方、文学ジャンルでは、「見つける」を除くと、使用頻度割合が 1 割を超える語はない。この結果を見ると、確かに、文学ジャンルは他の二つのジャンルに比べて、複合動詞の使用が圧倒的に多いが、ある特定の語が際立って多用されているということはなく、頻度の高い語が数多くあるということがわかる。

次に、上記の 16 語について、各語の、三つのジャンルにおける総使用頻度数に占めるジャンル別使用頻度割合を表 5 に示す。この結果から、三ジャンル全体の中での各語の特徴を見ていく。

既に見てきたように、複合動詞の使用は文学ジャンルが圧倒的に多い。この事実から、ある複合動詞について考える場合、三つのジャンルの総使用頻度数に占めるジャンル別使用頻度割合は、常に文学ジャンルで高くなるように思われる。しかし、実際には表 5 の結果を見るとわかるように、どの語も文学ジャンルが最多というわけではなく、各ジャンルに特徴的な語があることに気づく。

ここでは便宜上、各語の総使用頻度数のジャンル別使用頻度割合が約 7 割を占める、あるいはそれ以上の語を見ていく。

表 5 の結果を見ると、ジャンル別使用頻度割合が約 7 割以上を占める語は、予想通り、文学ジャンルに多い。特に 8 割以上を占める語としては、「駆けつける」（約 81％）、「睨みつける」（約 96％）、「叩きつける」（約 91％）、「締めつける」（約 84％）、「投げつける」（約 83％）があり、これらは他のジャンルでの使用が少ないことから文学ジャンルに特徴的な語群だと言えよう。

続いて、約 7 割を占める語には、「見つける」（約 69％）、「押しつける」（約 69％）、「突きつける」（約 70％）、「巻きつける」（約 67％）、「押さえつける」（約 73％）がある。これらの語も文学ジャンルでよく使われると言えるが、文学ジャンルで約 7 割ということは、他の二つのジャンルで残り 3 割が使われているということで、その配分割合を見ていくと、「押しつける」の場合は、社会科学が約 24％を示し、「突きつける」でも社会科学が約 25％となっている。一方、「巻きつける」は自然科学系（含技術・工学）で約 26％を示している。この結果から、「押しつける」と「突きつける」は自然科学系（含技術・工学）より社会科学で、「巻きつける」は社会科学より自然科学系（含技術・工学）でより多く用いられていることがわかる。

注目されるのは「盛りつける」で、自然科学系（含技術・工学）で約81％を占めている。この「盛りつける」は、料理関係で多用され、技術・工学分野に特徴的な語だと言えよう。

なお、社会科学では、使用頻度割合が約7割を超える語はなく、社会科学ジャンルに特化して用いられる特徴的な語はなかった。

表5を詳しく見ていくと、16語の中で「盛りつける」のほかにも、文学ジャンル以外で使用頻度の割合が最も高くなっている語がいくつかあることに気づく。「取りつける」は自然科学系（含技術・工学）で約50％を占め、残りは文学が約33％、社会科学が約17％となっている。「結びつける」は、社会科学が最多で約46％を占め、文学が約35％、自然科学系（含技術・工学）が約20％である。「受けつける」は、社会科学が最多で約44％、文学が約34％、自然科学系（含技術・工学）が約23％となっている。このほか、「張りつける」は、文学が約45％を占めて最多ではあるが、自然科学系（含技術・工学）でも約39％と相対的に高い割合を占めているのがわかる。

このようにジャンル間で見た時に、他のジャンルに比べて相対的に使用頻度割合が高い語というのも、当該ジャンルに特徴的な語とみなすことができ、「取りつける」と「張りつける」の2語は自然科学系（含技術・工学）ジャンルに特徴的な語として、「結びつける」、「受けつける」の2語は社会科学ジャンルに特徴的な語として捉えることができよう。

最後に、ジャンル間で重複して用いられる高頻度語を見ていくと、以下のようになる。三つのジャンルに共通する語は二重下線、二つのジャンルに共通する語は下線で示す。

自然科学系（含技術・工学）：
見つける、取りつける、結びつける、張りつける、盛りつける、巻きつける、押しつける

社会科学：
見つける、結びつける、押しつける、引きつける、取りつける、突きつける、

受けつける

文学:

見つける、押しつける、駆けつける、睨みつける、叩きつける、突きつける、締めつける、投げつける、巻きつける、押さえつける

三つのジャンルに共通して使用頻度が高い語は 2 語で、「見つける」と「押しつける」である。自然科学系（含技術・工学）と社会科学に共通する語は、「取りつける」と「結びつける」の 2 語、自然科学（含技術・工学）と文学に共通する語は「巻きつける」の 1 語、社会科学と文学に共通する語は「突きつける」の 1 語である。

5. 考察

以下では、三つのジャンルに共通して頻度が高かった「見つける」と「押しつける」を取り上げる。

5.1 後項動詞「つける」の意味用法

姫野（1999）は、複合動詞「～つける」の意味用法を語彙的複合動詞と統語的複合動詞の二つに分け、分類を行っている。語彙的複合動詞については、自立語「つける」の本義「接着、密着」を何らかの形で含むものであり、その上に「中途半端ではなく、動作をしっかり完全に行う」というニュアンスを伴い、格助詞「に」をとるかどうかによって二つに分かれるとしている。一方、統語的複合動詞については習慣を表し、長期的に見れば、一定の状況への絶えざる「接触」ともとれるので、「つける」の本義がある程度生きているとも考えられると述べている。

ここで、姫野（1999, pp111-112）の分類を、便宜上、1 枚の表に整理し直したものを表 6 として挙げる。

4. 結果で明らかになったように、後項動詞「つける」を持つ複合動詞の中で最も頻度が高かった語は「見つける」である。「見つける」は、姫野

表 6　姫野（1999）の分類

A　接着・密着の「～つける」 語彙的複合動詞															
格助詞「に」	例文					複合動詞								意味特徴	自動詞 / 他動詞
1. 有	現場 現場	に に	車	を	駆けつける 乗りつける	場所	に へ まで	（乗り物）	を	～つける		1.1		場所への到着	自＋つける＝自 他＋つける＝自 自＋つける＝自
	壁 鎖	に に	板 紐	を を	打ちつける 結びつける	対象	に へ と	物	を	～つける		1.2		対象への接着・密着	他＋つける＝自
	相手	に	皿	を	投げつける	対象	に へ に向かって にめがけて	物	を	～つける	対象への指向―完全な接触を目指す―	1.3.1		物理的接触	他＋つける＝他
	子供 農家	に から	用 米	を を	言いつける 買いつける	人	に へ に向かって に対して から		を	～つける		1.3.2		対人行為接触	
	自宅	に	部下	を	呼びつける	場所	に へ まで	人	を	～つける		1.3.3		主体者近接	
	道路	に			照りつける	対象	に へ に向かって			～つける		1.4		対象への強度の接触指向	自＋つける＝自 他＋つける＝自
格助詞「に」	例文					複合動詞					意味特徴				
2. 無	馬			を	押さえつける	対象			を	～つける	強調	2.1.1		物理的接触	他＋つける＝自
	子供			を	叱りつける	人			を	～つける		2.1.2		対人行為接触	
	秘密			を	かぎつける	情報			を	～つける		2.2		対象の補足	他＋つける＝自
	木			を	燃やしつける	対象			を	～つける		2.3		状態移行	他＋つける＝自
	心/気分/腰など			を を	（別物と）決めつける 落ちつける	対象			を	～つける		2.4		その他	
B　習慣の「～つける」 統語的複合動詞															
	例文														
	辛い物			を	食べつけている						習慣			［意志的動作を表す動詞］＋つける	他＋つける＝自 自＋つける＝自

＊本表は姫野（1999, pp111-112）の分類と説明について、例文を外に出す形で、村田が 1 枚の表に整理し直したものである。

（1999）の分類では、格助詞「に」を取らない語彙的複合動詞に分類され、意味特徴は 2.2「対象の補足」である。同じ類には、「嗅ぎつける」、「聞きつける」があり、知覚によって対象を捕えるという意味を持つ。

本研究の調査で、「見つける」は三つのジャンルのいずれでも第 1 位の圧倒的な高頻度語であることがわかったが、総数 3836 例の中には統語的複合動詞はなく、「発見する」という意味の用法のみであった。このことからも、日本語教育の現場では、「見つける」は分解せず一語扱いとし、初中級レベルで無用な混乱を招かないほうがいいと考えられる。しかし、学習者が上級レベルになり、「嗅ぎつける」、「聞きつける」が出てくるぐらいの文章を読むようになれば、「見つける」の語構成にも気付くはずなので、その時点で、「見る＋つける」に分解して、他の複合動詞と比較対照することは有意義だと思われる。本稿では、「見つける」については、これ以上の言及は控えることにする。

5.2　複合動詞「押しつける」の用法

「押しつける」は少数ではあるが、「圧しつける」という表記も見られた。姫野（1999）では、3.「対象への指向―完全な接触を目指す―」の中の 1.3.1「物理的接触」に分類される。格助詞「に」が動作の向かう対象や目標を示し、1.1 や 1.2 と違って「つけてとめておく」という結果が残らず、同じ類には、「投げつける、放りつける、打ちつける、叩きつける」などが入り、「つける」は、強さ、速さ、動作主の攻撃性を含むと説明される。

「押しつける」の実際の用法を見ていく。

「押しつける」は、ジャンル別に見ると、自然科学系（含技術・工学）が 86 例、社会科学が 260 例、文学が 758 例で、総数は 1104 例である。「押しつける」は、表 4 を見ると、自然科学系（含技術・工学）で 3%、社会科学で 8%、文学ジャンル 6%で、ジャンルごとの使用頻度割合としては、社会科学で多く用いられていることがわかる。また、表 5 を見ると、文学で

約 69%、社会科学で約 24%、自然科学系（含技術・工学）で約 8%というように、全使用頻度数に占めるジャンル別使用頻度割合で見ると、文学で非常に多く使われていることがわかる。

以下では、ジャンルごとに接続する名詞、副詞、受身形の用法について細かく見ていく。自然科学系（含技術・工学）ジャンルは N、社会科学ジャンルは S、文学ジャンルは L とする。

N：自然科学系（含技術・工学）

自然科学系（含技術・工学）ジャンルから 7 例を以下に挙げる。

N1：この加速度運動の間は操縦席に押しつけられるような強い力を受けます。
N2：骨のほうに指を押しつけるようにして指圧します。
N3：獲物を襲うときは、アゴを獲物に押しつけ、体を回転させて咬み切る。
N4：スプリングをリム側に押しつけて、シューをぴったりリムに面接触させる。
N5：肉の上にキャベツを重ねるときは、強く押しつけると肉がはみ出し、〜。
N6：〜時代のイメージをワインに押しつける。
N7：〜、地元住民の意思も聞かずに一方的にものごとを上から押し付けてくるのが気にくわない…。

N-①　目的語となる名詞

自然科学系（含技術・工学）では、目的語に具体名詞が来る例が 86 例中 53 例で、約 62%、6 割強を占めていた。その具体物を「押しつける」対象は、格助詞「に」か「へ」を伴って現れると考えられる。文中にその対象がいつも明確に現れているわけではないが、現れた例を見ると、自然科学系（含技術・工学）ジャンルでは、すべて格助詞「に」が用いられ、「へ」の例は見られなかった。

以下に目的語が具体名詞の場合と抽象名詞の場合を抜粋し、「〜を〜に」の形で挙げる。

〈具体名詞〉

頭を後ろに / 舌尖や舌縁を口蓋に / 片袖をもう一方の袖に / 手のひらや指のはらをひふに / ヒザラガイを岩に / 体を手に / 細胞質を細胞壁に / 掃除機の先端

を畳に / いっぽうのシューをドラムに / スプリングをリム側に / 粘土のひもを底に / 染料をしませたリボンを紙に / 土手の内側を型に / 背中を分娩台に / 赤飯おにぎりをフライパンに / 手斧を板に

〈抽象名詞〉

責任を母親に /「悪しき結果」を患者に / 責任を他人に / 自分の思いをクライアントに / 自分の夢を子どもに / 民営化を貧困者に / 都市において未解決の問題を線引きの外の農村に

具体名詞の例を見ると、その名詞の意味から自然科学（含技術・工学）ジャンルの内容だと推測できる例が多くあるのに対して、抽象名詞の例では推測が難しかった。

N-②　共起する副詞

以下に出現した副詞を挙げる（2 回以上出現した副詞は（　）内に回数を示す）。

強く（5）、ぴったりと、じわじわと、グッと、グイグイと（2）、権力的に、一方的に、強迫的に

「押しつける」場合には、二つの対象が必要で、一方をもう一方の対象に、どのように「押しつける」かということが副詞によって表される。用例の意味から、副詞を分類すると、以下のように大きく二つに分けることができると考えられる。

（A）強く：押しつける時の強さ
　　ぴったりと：押しつけた時の二つの対象の接触度
　　じわじわと：押しつける時の速さ
　　グッと：一点に力が集中した状態
　　グイグイと：一点に力が集中し、それが繰り返される状態
（B）権力的に / 一方的に / 強迫的に：
　　相手の意思に反して無理やり押しつける状態

（A）は、擬態語を含む状態副詞が用いられている場合で、押しつける時の強さ、速さ、接触度など、物理的状態を表している。もう一つの（B）は、な形容詞から派生した副詞の場合で、「押しつける側が対象となる相

手を威圧し、押しつけられる側は意思に反してそれを受けいれざるを得ないという心理的抵抗を伴う状態（以下、威圧的状態と呼ぶ）」を表している。

N-③　受身形

形態の観点から見ると、態の変換は 86 例中 17 例で、そのうち受身で用いられている例は 16 例（約 19%）、約 2 割であった。受身は、主体が物か人かに大別され、人の場合には意味的に心理的抵抗を伴う被害の意味を持つ場合（以下、「被害の意味」と呼ぶ）がある。16 例のうち 8 例が被害の意味を表し、抽象名詞とともに用いられていた。N-②で取り上げた「強迫的に」は受身形の文で用いられていた副詞である。

8 例は以下の通りである。

- 特に母親に責任が押しつけられる傾向がありますが、夫婦で責任を押しつけ合うケースも珍しくありません。
- 自己啓発は、自分の人生を悔いなく、幸福に生きるための技術である。したがって、他人に押しつけられるものではなく、〜。
- 医療事故がおきたとき、報道陣の前で深々と頭を下げ、ボソボソとおわびの言葉を述べる役割だけが院長に押しつけられている。
- 自分だけに責任を押し付けられた無念の思いと責任を逃れたい複雑な気持ちが込められているように読み取れる。
- 消費する側は、世界共通で趣味し好を押し付けられていることに反発し、…。
- おかしなところは自分で気がついて、こうだなと変えていけばいい。誰かに押し付けられてもだめよ。
- 夫は、子どもとのお風呂タイムを義務ではなく、楽しみにしていた。というより、最初は妻に押しつけられた義務だと受けとめていたようだが、〜。
- ですから性的な問題にしても、女性のエロスが強迫的に押しつけられているという状況も、ずいぶん出てきているんじゃないかと思うんですね。

以上、自然科学系（含技術・工学）ジャンルでは、目的語となる名詞を見ると、6 割以上が具体名詞で、「実際にある物を目標の場所に、力を込めて押してつける」という意味で使われている例が多かった。次に、副詞が用いられている例を見ていくと、擬態語を含む状態副詞が用いられる場合

は、押しつける時の強さ、速さ、接触度など、「押しつけ方」の物理的状態を表す例であった。一方、な形容詞から派生した副詞「権力的に」、「一方的に」、「強迫的に」が用いられる場合は、威圧的状態を表していた。言い換えると、複合動詞「押しつける」の前項動詞「押す」は、物理的に「押す」場合と、権力などの抽象的な力で相手を「威圧する」場合の二通りの意味で使われていて、その意味の違いは副詞の種類にも反映され、「押しつける」の意味をより明確にしていると言える。最後に、受身形で用いられている場合を見ると、半数は、「久しぶりに重力に似たおしつけられる力を体験した」、「二つの茶碗は強く押しつけられ、離れなくなるのです」というように、物理的に圧力がかかる状態を表す例であったが、残り半数は、例えば、「自分だけに責任を押し付けられた無念の思い」、「消費者側は、趣味し好を押し付けられていることに反発し」というように、被害の意味の例であることがわかった。このように、受身形の場合も、副詞の場合と同様、物理的状態と威圧的状態に分類できたが、後者の例では、その内容が人間活動の場における威圧的状態の描写であることから、例を読んだだけでは、その例が自然科学系（含技術・工学）ジャンルに属すのかどうかを判断するのは難しかった。

なお、当該ジャンル全 86 例の内訳を調べると、自然科学分野 36 例に対して、技術・工学分野は 50 例で、「押しつける」は自然科学分野より技術・工学分野でより多く用いられ、上記の「権力的に / 一方的に / 強迫的に」という副詞 3 語の例はすべて技術・工学分野の例であった。

S.　社会科学

社会科学ジャンルから 7 例を以下に挙げる。

S1：乳幼児期の甘やかされが身に染みついた子どもに、強制的に何かを押し付けたところで反発を招くだけである。

S2：個々の地域の特殊事情があまり考慮されないまま、画一的な政策が地方に押し付けられがちであった。

S3：戦後教育は彼らの内在的な反省から改革されたのではなく、もっぱら上

から、外から、占領軍によって押しつけられたものですから、〜。

S4：〜現実は、働いているときは低賃金がおしつけられ、退職後は現在の社会保障制度のもとでは生活していけない状況におかれています。

S5：〜、戦前のように介護・ケア問題を、家庭や地域社会に押しつけて、すませるということは事実上不可能となった。

S6：〜中小企業や零細企業に対して、不利な取引を押しつける場合もある。

S7：彼はもらったばかりの銅の円盤を額にペタンと押しつけた。

S-① 目的語となる名詞

社会科学では、具体名詞が目的語に来る例は非常に少なく、260 例中 21 例[7]というように 1 割未満（約 8%）にすぎなかった。その具体物を「押しつける」対象は、文中に現れない場合もあるが、現れた例では、「押しつける」先はすべて格助詞「に」で表され、「へ」が使用された例はなかった。また、そのうち 4 例では、複合辞「に対して」が用いられていた。

次に、目的語が具体名詞の場合と抽象名詞の場合を抜粋し、「〜を〜に」の形で挙げる。

〈具体名詞〉

頭をテーブルに / 対手の右関節を下に / 足をパネルに / 熱いアイロンを肌に / 利回りの低い商品を無知な契約者に / 基地を沖縄内に / 車輪を地面に / 迷惑施設を郡部に / 額を床に / 騎士の槍を己の胸に

〈抽象名詞〉

観念を他人に / 過酷な人べらし「合理化」を銀行労働者に / 画一的な政策を地方に / 厄介な仕事を裁判所に / 責任を学校に / 平和憲法を日本に / 社会的負担を国民全体に / 非人間的労働条件と不当な賃金を大農園の労働者に / 無償労働の担い手を女子労働に / 負担を他の兄弟に / 無理難題を子会社や系列企業に / ドル安円高を日本に / 母性神話を母親の日常に / 多くの特殊な勉強を子どもに / 理想像を他の誰かに / すべてを部下に / 過ちの責任を少年一人に / 介護・ケア問題を家庭や地域社会に / 自分の価値観を人に / 私たちの「苦しみ」を世界に / 米国型モデルを州レベルに / 受難を第一線のホワイトカラーに / 住宅の理想や夢を住み手に / 高い値段を消費者に / 不利な契約を弱者に / 不利益を当事者に / 個人的なシステムを他人に / 一国の定義を他国に / 「痛み」を弱者に / 無理なことを日本に / 自分たちの世代のつけを私たちの世代に / 未完成な IT を小中学生に / 耐え難い要求を妻に / 負担を先進的な自治体に / 介護の負担を子供に /

労働条件や服務規律を労働者に / 国内の貧困や経済破綻の責任をグローバリゼーションに

社会科学では、大半の例が抽象名詞を目的語とする例で、内容的には威圧的状態を表していた。また、目的語を具体名詞とする例でも、物理的状態のほかに威圧的状態を表す例が見られた。

上記の目的語とその対象（「～を～に」）の組み合わせを見るとわかるように、一見して社会科学ジャンルの内容だと分かる例が非常に多かった。

S-②　共起する副詞

自然科学系（含技術・工学）ジャンルと同様に、出現した副詞を以下に挙げる（2 回以上出現した副詞は（　）内に回数を示す）。

ペタンと、強く、軽く、きつく、次々に（2）、一方的に（6）、無理やり（3）、無理に（3）、勝手に（2）、強制的に、強引に、不当に、露骨に、いたずらに、唐突に、必然的に、何としても、とりあえず、いつも、相変わらず

次に、用例における副詞の意味から、以下のように分類した。

（A）物理的状態
　ペタンと、強く、軽く、きつく：
　　押しつける時の強さ、接触度などの物理的状態
　次々に：同種のものを、時間を置かずに連続して押しつける状態
（B）心理的抵抗を伴う状態
　一方的に（6）、無理やり（3）、無理に（3）、勝手に（2）、強制的に、
　強引に：相手の意思に反して無理に押しつける状態
　不当に：正当性がないにも関わらず、相手に押しつける状態
　露骨に：相手の状況を考えず、あからさまに押しつける状態
　いたずらに：無駄にも関わらず、相手に押しつける状態
　唐突に：予想外に相手に押しつける状態
　必然的に（＋受身）：あることが選択の余地なく押しつけられる状態
（C）その他
　すべて（3）、全面的に、何としても、とりあえず、いつも、相変わらず

自然科学系（含技術・工学）ジャンルと同様、（A）の副詞は、押しつける時の強さ、接触度、頻度などの物理的状態を表しているが、社会科学

ジャンルではこの例は少数であった。なお、副詞「次々に」については、「押しつけ方」の強弱や接触の度合いを表す「強く」や「ペタンと」とは異なり、「押しつける」動作の連続性を表す語なので、「商品」のような具体名詞だけでなく、「無理難題」のような抽象名詞にも用いられていた。

社会科学ジャンルで非常に多かったのは、副詞の使用頻度からもわかるように（B）の副詞が表す威圧的状態の例である。な形容詞から派生した副詞だけでなく、「無理やり」のように意味的に同義の副詞も現れている。「不当に」、「露骨に」、「いたずらに」、「唐突に」も、否定的に用いられる語であることから、心理的抵抗の元となる理由の多様性がこれらの副詞によって表されていると言えよう。「必然的に」は、（B）の他の副詞とは異なり、語自体は否定的意味を持たないが、受身形「押しつけられる」とともに用いられ、内容的には「事の成り行きで選択の余地なく（押しつけられる）」という否定的な意味で用いられていた。（C）は、（A）、（B）に分類できない語をまとめたグループである。使用頻度から重要だと思われるのは、「すべて」、「全面的に」という全体を表す副詞である。「すべて」は名詞でも用いられるが、現れた 3 例は副詞の例で、「責任をすべて相手方に押しつけ、〜」、「面倒なところはすべて最終組み立てラインに押し付けてきたのではないか」、「すべて自己流を押しつける井中蛙上司」というように用いられている。各例の目的語、「責任」、「面倒なところ」、「自己流」は、いずれも「押しつけられる側」が心理的抵抗を持つ抽象名詞で、100％を示す「すべて」は、その押しつける程度が最高レベルにあることを表している。押しつけられる側からすれば、厄介な事柄を、その意思に反して 100％という絶対的かつ最高レベルで受け入れざるを得ない状態に置かれるということで、最悪の状況だと理解される。「全面的に」も同様である。したがって、（C）の「すべて、全面的に」という副詞は、「押しつける」程度が最高レベルにあることを強く印象付ける働きを持つことから、これらの副詞の使用によって、否定的な意味がより一層強調されると考えられる。

S-③　受身形

態の変換は 260 例中 62 例で、すべて受身であった。全使用頻度数に占める割合は約 24%、約 4 分の 1 であった。62 例の意味を個別に見ていくと、どれも被害の意味で理解することができ、目的語は大半が抽象名詞であった。特徴としては、社会科学ジャンルということで、「押しつけられる」ものが、「日本国憲法、平和憲法、戦後教育、憲法九条、教育基本法」などの例が 19 例（約 3 分の 1）に上った。

62 例のうちの 10 例を以下に挙げる。なお、上記の社会科学ジャンルの例として挙げた S2 から S4 も受身の例である。

- ～、ビジネス上の効率だけを考え、それぞれの国や地域の文化を無視して決めたものを日本は押し付けられ、～。
- 生涯教育といって生涯教育をおしつけられ続け、継続教育といっていつまでも教育から解放されないでいるのはやりきれない。
- 誰が、誰に「押しつけられた憲法」なのか。
- 民主憲法、平和憲法を押しつけられた。
- ～生徒は判断のしようがなく、一方的な結論を押しつけられている。
- 私にすれば、次々に無理難題を押しつけられる日々であったが、～。
- そして、その犠牲は、いつも女性に押し付けられてしまう。
- ～自己責任として損失だけが押しつけられることになりかねない～。
- ～、タバコの火を押しつけられた“根性焼き”の痕など、いまだに身体のあちらこちらに残っている。
- 机が容疑者の胸に強く押しつけられる拷問の道具として使われる。

以上、社会科学ジャンルでは、具体名詞が用いられる例は 1 割未満と非常に少なく、用例の大半は内容的に「押しつける側が対象となる相手を威圧し、押しつけられる側は意思に反してそれを受けいれざるを得ないという心理的抵抗を伴う状態（威圧的状態）」であった。「押しつける」対象を表す格助詞はすべて「に」が使われ、複合辞「に対して」が用いられる例も 6 例見られた。

次に、共起する副詞から用例を見ていくと、自然科学系（含技術・工学）ジャンルとは異なり、押しつける時の強さ、接触度、頻度などの物理的状

態を表す例は少なく、大半が威圧的状態を表す例であった。この威圧的状態の例が多いということは、副詞の種類にも反映されている。「無理強いをする」という意味での威圧を表す副詞としては、な形容詞から派生した副詞「一方的に、無理に、勝手に、強制的に、強引に」があり、同義の副詞「無理やり」も用いられていた。同じく心理的抵抗を伴う副詞として、「不当に、露骨に、いたずらに、唐突に」も使われていた。さらに、「押しつける」程度が100%という絶対的かつ最高レベルであることを表す副詞としては、「すべて」、「全面的に」が用いられ、それらの副詞の使用によって、否定的意味合いがより一層強調されていた。

最後に、受身形については、全用例の約4分の1に当たる62例すべてが被害の意味の用法として捉えることができた。既に述べたように、社会科学ジャンルに現れた「押しつける」の例の大半（約9割以上）は威圧的状態を表すものであった。したがって、そのうちの約4分の1強（約26%）の例が、受身形の形で、「押しつけられる」側の視点から描写されていたということである。

このように社会科学ジャンルというジャンルの性質上、「押しつける」を用いて表される場面は、大半が人間活動の場となる。そのような場では、対象となる人間、組織、国家などの力関係の大小、優劣などによって、「押しつけられる」側が意思に反して、ある状況を受け入れざるを得ないということがあり、その描写に複合動詞「押しつける」が使われると考えられる。その結果、社会科学ジャンルでは、自然科学系（含技術・工学）ジャンルに比べ、被害の意味で用いられる例がはるかに多くなっていると言えよう。既に見たように、自然科学系（含技術・工学）ジャンルにおいても、被害の意味で用いられた例はいずれも人間活動に関係するものであった。

6. おわりに

本稿では、BCCWJを用いて、後項動詞「つける」を持つ複合動詞につ

いて、三つのジャンル（自然科学系（含技術・工学）、社会科学、文学）における使用頻度調査から高頻度語群を抽出した。最も頻度が高かった「見つける」は既に一語化していると考えられるため、使用頻度第 2 位の「押しつける」の用法について、自然科学系（含技術・工学）と社会科学の二つのジャンルを対象に、三つの観点（①目的語となる名詞、②共起する副詞、③受身形）から分析した。その結果、BCCWJ に現れた「押しつける」はすべて語彙的複合動詞で、その意味用法は、物理的状態と威圧的状態の二つに大きく分けられ、自然科学系（含技術・工学）ジャンルと社会科学ジャンルではその使用傾向に違いがあることがわかった。今後、文学ジャンルにおける用法を分析し、三つのジャンルでの使用傾向を踏まえた上で、教育方法についても検討していきたい。

謝辞

本研究で用いたデータは、村田•山崎（2012）で抽出したデータの一部を使用しています。使用をご許可くださった大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所教授山崎誠氏に感謝の意を表します。

注

1） 村田（2016）は、村田・山崎（2012）ならびに村田（2013,2015）の問題点を再検討し、改訂した結果である。
2） 村田（2013, pp79-80）参照。
3） 今回の調査中に誤りが見つかったため、表内の数値を改めた。誤りは、自然科学系（含技術・工学）の複合動詞リストに「取り片付ける」が入っていたためで、総数を 2547 と改めた。
4） 今回、1 語ずつ用例を検討していく中で、動詞の分類過程に誤りがあることに気づき、それを表 3 の数値内に反映させた。具体的には、文学ジャンルで「あたしは敵をニラみつけた。」（ID: LBc9_00168）という文が、「見つける」の用例として分類されていたため、「睨みつける」に分類し直した。
5） 村田（2012, p101）では、26 の後項動詞について調べていて、そこでの「見つける」の使用頻度は全出現数の約 25％となっている。
6） 自然科学系（含技術・工学）ジャンルに出現した「見つける」、「取りつける」、「結びつける」、「張（貼）りつける」、「盛りつける」の具体的用法の考察は、

村田（2012, pp100-102）に詳しい。

7）具体名詞の中に「商品」、「基地」、「迷惑施設」を含めているが、これらの語は、「アイロン」、「車輪」というような単なる具体物の意味だけではなく、同種のものの代表的、象徴的な意味も含むため、具体名詞か抽象名詞かの判断が難しかった。「契約」もその例である。

参考文献

姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房

村田年・山崎誠（2012）「自然科学系書籍における複合動詞の使用傾向―後項動詞を指標として―」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 40 号 pp83-112

村田年（2013）「社会科学系書籍における複合動詞の使用傾向―後項動詞を指標として―」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 41 号 pp67-95

村田年（2015）「文学書籍における複合動詞の使用傾向―後項動詞を指標として―」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 43 号 pp61-80

村田年（2016）「BCCWJ を用いた複合動詞使用頻度調査表の改訂－22 後項動詞を指標として－」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 44 号 pp115-131

辞典類

村上征勝監修（2019）『文化情報学事典』勉誠出版

三省堂（2012）『新明解国語辞典　第七版』

大修館書店（2011）『明鏡国語辞典第二版　大型版』